

地球第十三卷第一號

昭和五年一月一日

京都古地圖の研究 (一)

(圖版第二版付)

藤 田 元 春

大正十三年十一月京都府市の都市計畫課が、大丸の四階で資料の展覽會を行ふたときに、多くの京都の古地圖が出た。柳庵隨筆をみると、相國寺寶藏の古圖や應永京圖や京之水の古圖及拾芥抄の京圖の部分の寫しがでてゐるが、文政頃に慥かに柳庵の見たであらう處のこれらの古圖はその中たゞ一つをのぞいて、すべては出陳されなかつた恨がある。或は田中勘兵衛氏などの蒐集中に柳庵のみた古圖があるかもしれない。予は今後に於てさうした古圖の出現を望むと同時に、大丸の寫眞部が出版したやうに京の古地圖の寫影類が、續々として世に出ることを期待する。従つて御大典記念事業の一として京都市役所の編纂した「京都名勝誌」の附圖に四葉の古地圖を入れたことをよい思付きとするものである。但しこの附録は實は五圖で、その一つは京都史蹟圖と題し、現在の地形圖の上に、たゞ赤丸を加へて史蹟を表記したゞけのものである。つぎに拾芥抄の平安京圖、中古京師内外圖、中昔京師地圖の三枚があるがこれは後に説明する通り、寶曆の編輯地圖であつて、地圖發刊當時の實際でない。従つて最後一枚、慶安五年版の平安城東西南北町並之圖のみが、この名勝

誌に附する所の唯一の古地圖である。

予の見る所を以てすれば、大丸から出した「華洛古地圖集」は必しも最良の古地圖集ではないがしかし最近刊行されたものでは、右の圖集以前に何物もないから研究者にとつては、今日迄はこれが唯一の資料であつたらう。

京都帝國大學圖書館久原文庫のごときは最も有力な京都古地圖の蒐集所であるが、三高圖書室にも二三の京都古圖がある。最近になつて予は林森太郎氏及山本臨乘氏の多數の珍藏を観るの機會を得た。

さうしたいろ／＼の古地圖を見てゆく間に、かうした地圖の刊行にも、時代と共に進歩の跡があらはれて、簡單から複雑に、素朴から念入になつてゆくことを知つた。もとは單に町名の讀方のみを目的に出版されたものが、段々案内記風になり、それに手引の裏刷をつくるもあれば、鳥瞰圖の一覽繪にもなるといふ風であり、もとはたゞ木版の墨摺であつたものが、やがてその墨摺に一々彩色を加へ、やがて五度摺(墨、赤、黄、青、藍)となり、その混刷のために、紫や樺や淺黄などの部分が出来て、七色をしめすやうになり、それが一轉して墨版の上にカッパ摺を施し、カッパ摺から近世の銅版といふ風にその技工が進むと同時に、その地形描寫がもとはたゞ、市區のみ墨摺にしてあつたものが、やがてその黒い市區の周圍に寺や名所の圖を入れるやうになり、それが承應版になると道里をあらはした周圍に南畫風の山水をいれる、やがてそれから一步を進めて素朴な地圖らしい山岳重疊の波狀をいれるやうになつて面積の考へも段々正しくなつてきた。

同時に同じ書肆からたゞ一種の木版墨摺を出したのではなくて、大、中、小種々の大きさ、素描、彩色種々好みに應じて各種の京都圖を賣り弘めるやうに變化し、發達したことがわかつた。

さうして予はあさりあるいた最後に、明治九年版の「京都區分一覽之圖」なるものを見出したのであつた。これは實に我第三高等學校の珍藏本であり、山本臨乘氏も之を所藏してゐられる所の一本である。

しかるにこの圖は、何故か大丸の展覽會には出なかつたものである。もし出たとすれば明治二年の古地圖をその圖集中に組み入れた都市計畫課の君子は必ずや本圖の複本をつくつて圖集中に入れねばならぬと考へられるからである。先日も當時さうした地圖の蒐集にあたられた今の中京區主事光明正道氏に見せたところ、これは初見だといはれた位である。

茲に於て予は今日までに見た多くの京都の古地圖を二類に分ち一を後世の編輯地圖として一を刊行された地圖とし、就中後者に關して一應の説明を加へさうしてこの明治九年版について、いかにそれが明治維新史を學ぶ人の好參考になるかといふことを説明してみやうと考へる。蓋しこれは京都地圖として初期の銅版であり且彩色されたものであるからでもある。

第一類 後世に編輯された地圖

- 一、花洛往古圖 寛政三年版 京大圖書館藏約一萬分一縮圖 京之水附圖（西曆一七九一年）
- 二、皇州緒餘撰部中古京師内外地圖 但、寛延三年圖（一七五〇年） 八千分一縮尺
- 三、中古京程之圖 約八千分一縮尺

四、皇州緒餘撰部中昔京師地圖 寶曆三年の圖（一七五三年） 八千分一縮尺

花洛往古圖は拾芥抄圖を寫して周圍に山川を入れたものであり、皇州緒餘撰部中古京師内外の圖は、故實叢書に「寛政三歲次庚子初夏、攝州東生郡四天王寺相坂秀水、京師書生、森謹齋幸安珍重圖並識」と跋書したものである。京都名勝誌には、後者が印刷されてゐる。つぎの中昔京師地圖の山本氏藏本は寫本であるが、これには寶曆三年癸酉正月二十四日、攝州坂陽高津宮、北字水堂との跋書があるが、流布本故實叢書には、それにも京師書生、森幸安著圖並識の十一字が増してある。原本は七千分一と八千二百分の一の二種である。即ち京の一町（四十丈）を五分又は六分にした縮尺である。

京都帝國大學地理教室の古地圖の中には同じ森謹齋の山城國舊圖があり「皇州緒餘撰部」といふ冠句が同様についてゐる。寛政頃に住たこの歴史地理學家の手で三者共に出來たものであるらしい。但し右の山城圖には別に富小路家臣近藤榮藏、（山城國葛野郡西院村住家藏）と墨書し、寛政十戊午年（西紀一七九八年）十二月朔より同十一年己未正月二十日迄の間に清書した由の「皇州緒餘撰部山城國舊地圖草稿上下、並洛外中古圖下書」と題した寫本の粗末なものがついてゐる。蓋しこの地圖は當時出來はしたが印刷版行に及ばなかつたのであらう。

但しこれを山本臨乘氏からきくに、右の地圖の中で、中古京程圖は寶曆の寫本であるけれども、氏はかつて圖書寮で元和の年號の入つたこれと全く同じ寫本をみた、それでこの京程圖の古いことを知つた、恐らくこの中昔京師圖や、中古京師圖も後世勝手に森謹齋が作つたのではなく、古く

所傳があつたのではなかつたかとの事である。

そこで予はこれをかの柳庵隨筆の相國寺の古圖及應永京圖に照合してみた。不幸にして隨筆本のは六波羅及本園寺附近しかないけれども、その兩者とこの本とはその部分に全く符節を合する。或はこの古圖は柳庵の所謂相國寺寶藏の應永の寫本などから出てきたものではなかつたかと考へられる。いづれにしても現存せる京都の古圖では、かうして故實叢書本もしくは上記の寫本以外にはないやうである。従つてたとへ編輯物であるとしても、その由來が古いとしてよからうと思はれる。

第二類 刊行地圖

京都古地圖の刊行されたもので、今日に残存してゐるものは、寛永版(十七世紀の前半)を最古とする。蓋しかうした出版物の常として同じ木版もしくはそれよりも前に出た繪を複製して、後から後へ何回となく同様のものが出版發賣される。従つて同類の地圖はその最初に溯つて考へることが出来る。たとへば寛永版の町の名付の如き、その最古のものは眞に町名のある條坊のみを圖してゐるがやがて第二の版はその周圍に三十三間堂、大佛、祇園等々の名所古刹を圖して周圍に配してゐる。それがやがて承應の新版になると(第二期作品
十七世紀後半)山川の形勢を入れて洛中洛外の圖にする。これ又標題から大さまで同型の、しかしながら後出の出版物が多いものである。

やがて十七世紀の終りになると、四代將軍家綱の治世になる。貞享元祿といへば江戸時代でも太平の休徵があらはれる。京都も段々復興してきて遊覽の人が多くなつたと見え、貞享三年には寺町二條の本屋林吉永が京大繪圖なるものを出版する。五千分一の大きさで黄色と草色と朱との三色で

彩色を加へた上下二枚の大繪圖が出来る。これが第三期の代表的大地圖である。この大繪圖はその後何回も複製され同じ林吉永が發賣して寛保に及ぶ。林吉永はこの時大繪圖のみでなく、その二分一の中繪圖、四分一の小繪圖を出し、摺りも素描の外に色摺も種々類を異にして賣り出したとみえる。寶曆四年版(一七五四)の古地圖には林でなくて、寺町四條の菊屋長兵衛から出した小繪圖がある。天明八年(一七八七)の京都大火圖の如きもやはりこの小繪圖であつた、いづれも第三期の版本とみなしてよいらしい。

時代は進んでやまない。徳川氏三百年の治世もその末期に近づき、京都は天下の志士の集中する中心になり、世運漸く轉變せんとするの御代になつた。天保弘化嘉永といふ年代、換言すれば十九世紀の前半は實に京都が特に大に世に現はれた時期である。

我地圖の刊行も亦この際大に發展して第四期に入る。即京三條麩屋町北角竹原好兵衛出版の天保二年改正京町繪圖細見大成は實にその好標本であり、當代の代表的作品である。後にも説明する通り、竹原から出た京都圖はこの大成の外に猶大小各種があり、同時に中形の四色摺が出版されてゐる。而してこの巨大な四千五百分一の大地圖はその周圍の山に_マ字形の松をいれ特色を發揮してゐる。勿論その形式は以前にもあつたが明治二年東洞院三條村上勘兵衛出版の古圖もやはりこれを踏襲してゐる。この際墨摺の上にカッパ摺といふのを工夫して色版を簡單にした。予はこれを以て第四期の特色とする。

同じ明治の地圖ではあるが、明治九年改正京都區分一覽之圖として、村上勘兵衛から出た地圖は

以前明治二年乃至同五年版(同じもの)の木版カッパ摺でなく、全く新しい銅版である。併しその彩色法には猶カッパ摺らしい面影があり、川だけは別に彩色したらしい。明治十二年辻本定治郎出版の區畫改正京都之圖、同年十二月風月堂出版の京都府區組分細圖及、明治十六年福井源次郎出版の京都市區分一覽圖、いずれも銅版であるが、その彩色は型紙をあてゝカッパ摺にしたものゝ如くである。これは今日程の石版が無かつた時代であるから、致方がないことであつた。

しかし銅版彫刻は、さうした彩色法を別にして、天保の世に出現した。多くは名所の圖であつて「花洛一覽」のやうな鳥瞰圖に用ひられ、市街圖として用ひられはしなかつたらしい。現にさうしたものは發賣されず明治五年猶木版の大繪圖がうれてゐたのであつた。但し銅版になつてから地圖のスケールは小さくなり、紙は段々わるくなり、十六年版の如きは薄いペラペラの洋紙であつて轉た世の澆季なるを感じしむるものがある。しかし明治九年の銅版はその最初のものであつたから版も大きいし圖柄も明瞭である。ことにこの版には珍らしい史蹟が表示されてゐる。予がこれを第五期の代表的作品とする所以がさうした記事の上に於ても存在する。

以上略叙した理由によつて以下順を追ふて、この五種の刊行物とその各特色とを叙述するであらう。

第一期 (十七世紀前半) の作品

五、寛永平安町古圖(刊) 辻虎之助氏藏本 (圖版第二)

六、平安城東西南北町並之圖(刊) 田中勘兵衛氏藏本

京都古地圖の研究

七、慶安五年版 平安城東西南北町並之圖

この三者は全く同じ種類の古圖である、三者の中で慶安版のは、明にその出版年月がでてゐる。そのフットノートとして「慶安五辰正月日山本五兵衛開之」とあるから（即承應元年）西曆一六五二年の刊行物である。それに比べて田中氏の方は遙に古い。これが寛永版だといふ證據は、傾城町としての島原の有無によつて判せられる。寛永版の方には下京の室町と西洞院との間、六條の北三町今の楊梅、鍵屋、的場の三筋に「けいせい町」といふのがあり、西洞院五條に大夫町といふのがあつてまだ島原が出てゐない。山川名跡志をみると、慶長七年に室町にけいせい町を置かれ、それが四十年つゞいて、やがて寛永十八年に今の地にうつされたのである。従つて田中氏及辻氏の兩本は寛永島原移轉以前のものだといふ確實な證明が出来る。もし之を寛永元年とすれば西曆一六二六年版である。現存する京都最古の印刷刊行の地圖といはねばならぬ。しかしその圖する所は、北は相國寺を限り東は寺町西は千本、南は七條、全く縦横の市街に於ける町名をしらす丈けのものである。最も古いと思はるゝ辻氏の圖は一條以上を略し且標記がない、而してこれに「疇昔、京、條、通、小路、種々雖有、當京條通厨子小路町名付如此也都記」としてあるが、これをうけた田中氏の藏本はたゞ「當京條通厨子小路町名如此新板開者也」としてしまつた。この點に於てこの種の京の町名地圖は、辻氏の本を以て最古とせざるを得ない。しかも町名記であるから町名以外の何物もない。一町四十丈を五分内外に縮圖した凡八千分一之地圖である。面白いことは田中氏及慶安の圖には寺町の東、千本の西に名所古刹の繪が配置されてゐて、洛外の様子をしらすとしてゐることである。

換言すれば町名だけでなく、名所の案内記たらんとするの工夫が出現し初めたことである。

第二期 (十七世紀後半) の作品

八、平安承應古圖 承應三年刊(一六五四) 山本臨乘氏藏本

九、萬治元年刊行 京都圖 (一六五八) 田中勘兵衛氏藏本

十、平安城并洛外圖 寛文七年刊(一六六七) 杉浦三郎兵衛氏藏本

この三者は又同類であつて其刊行年月が接近する。前二者はいづれも「新版平安城東西南北町並洛外之圖」と題し承應圖のみ陰刻にしてある。縮尺は一町四十丈を五分、八千分一であることは寛永版にひとしい。最後の圖は新版平安城並洛外之圖で、縮尺は一町を三分、即一萬二千分一にしてある。蓋し寛永版は平安城東西南北町並之圖であつたが凡五十年を経過したので、圖柄が一段進歩して、之に洛外を増加したのである。恐らくこの時にも同様の試があつたであらうと思ふが、この第三類中の最古版だと思はるゝ承應圖は、そのフットノートに

「此圖世に四板ありといへども、御公家衆名所無之一二三付を以、公家屋敷不殘令書付者也

洛外の名所舊蹟方角或は山川道筋相違有之仍而此度粉骨をつくし、其所々を考あらためて令開板者也 承應三甲午五月吉日

板本、北山修學寺村、無庵」

とある。即ち當時、京の町並圖が四種賣れてゐたのであつた。現に承應二年版の公家屋敷のないのを山本氏が所藏してゐられる。本圖は公家屋敷として、一、平松殿より百十九、權中納言御局まで、

及横通惣名付縦通惣名付、一條より方々への道のつもり、ひえい山へ二里半以下大津へ三里等々の表が加へられ、洛外に於ての山川の形勢を付加したので洛中洛外の圖となつたのである。しかし伏見の市街は之を略し、京橋より大阪舟路十里なりとするしてゐる。つぎの萬治元年版は圖柄及フートノート全く之にひとしいが、洛外に田の形を加へた丈けがちがう。猶前者は二條城北に板倉周防守下屋敷南に酒井讃岐守の屋敷をしるしたが、萬治版には牧野佐渡守と酒井讃岐守とにかへてゐる。目立つのはこの圖では百萬遍が荒神口にあり、四條に假の板橋がかゝつてゐるに過ぎないことである。河原町は百萬遍以北に延長せず、高瀬川が四條以南五條橋までの間に於て加茂川に混入してゐることも特色である。寛文七年版は前述のごとく改版で、八千分一を一萬分一にしたものであるらしいが、しかし圖柄やゝおとつてみえ、そのフートノートもやゝちがう、曰く

此圖は洛陽洛外公家武家並寺方等にいたる迄近かくかはりたる所多くありしを、ことごとくあらためて令改板者也
寛文七丁未卯月吉日、伏見屋開板

とあるので、その様子がわかる。

この圖につゞいて寛文八年（一六六八）三條寺町かど升屋の出版した同様の地圖がある（山本臨乗氏の藏本）。それには、

此圖世に古板おほしといへども禁中様御さくじに付御公家、武家衆、その外寺、井に町等やしきかへ是有につきいまあらため令開板者也

戊申寛文八年卯月吉日 三條寺町かど升屋

とし標題に新板平安城南北町並洛外之圖と銘をうつたのが出た。御所御造營の後である。この地圖

の方が後世珍重されるべきものとせねばならぬ。

第三期 (十七世紀末より十八世紀) の作品

一一、京大繪圖 貞享三年刊(一六八六) 山本臨乘氏藏本

一二、新版京之圖 元祿十二年刊(一六九九) 杉浦三郎兵衛氏藏本

寛文版が世に出てから約十年の後御繪圖所林氏吉永の刊行した「京大繪圖」が出た。これは其頒布が多かつたので、今日に至つても其類本が甚だ多い。但この圖の彩色したのは、一々筆で描いたのである。林吉永は當時寺町二條上ル本屋であつた。寛保元年辛酉十一月、の大繪圖(京大地理學教室藏本)には、

此繪圖、貞享三年丙寅年開板雖世弘、猶又今度洛中洛外寺社名所舊跡、町小路、八分一町之刻を以、新地等迄悉相改并諸方道法方角之圖相加へ令再板者也

と記してゐる。一六八六年の開板が、西紀一七四一年迄半世紀以上有効に賣れたのである。一町を八分の縮尺であるから、恰も五千分一の分數である。元祿頃の製圖家はさうした分數を銘記するやうに進歩したのであつた。従つて貞享圖は實にその大繪圖の初版である。さきの牧野佐渡守屋敷が土屋相模守下屋敷とかはる。大繪圖だから公家屋敷は、本圖中に入つて、別に縦横の町名表の外に、今度は諸大寺の末寺の數とか、大佛殿の寸尺とか、一條札の辻からの里程、さては勸修寺、藤の森、上醍醐寺、比叡山延暦寺、高山寺等、洛中洛外あらゆる名勝の説明がはいつてゐるものもうれしい。伏見の市街はないけれども豊後橋、京橋、毛利橋の位置、町屋がかいてある。市内では河原

町が通り、高瀬川が分離してくる、全體に於て餘程近世化した町になつてゐる。杉浦氏の元祿版も同じく林吉永が十二年正月吉日に發賣したものであるから貞享版とかはらぬ。所司代が松平紀伊守にかはり、酒井やしきが「京都御奉行」とかきかへてある位である。予の見た此種の大繪圖はこの後のもので大同小異であつて、後程紙質もわるくなり、版も汚れてくるの例である。林吉永は單にこの大繪圖のみでなく、その紙の大きさが丁度四分一に當るところの「新板増補京繪圖」といふ他の小さい木版を同時に賣り出してゐた。この方も今日よく古本屋から見出されるであらう。

一三、京師大火圖 天明八年（一七八八年） 藤貞幹藏本の印がある 山本臨乘氏藏

のごきは實にその一例であつて、林氏から出た小形の板本に天明大火の焼失區域だけを色づきにして表出したものである。大さ凡二萬分の一の縮尺になる。

天明の大火は同年正月の火災で、東は大和大路より西は千本まで、南は七條より北は鞍馬口まで京の大半を失つた。焼失町數三千百餘町、皇居、仙洞、二條城以下邸宅民戸すべて焼土となり、家を失ふこと凡十八萬三千三百餘軒、寺を失ふこと九百二十八ヶ寺、前古未曾有の大慘事であつた。

但し西本願寺、島原、北野附近、相國寺、上御靈等、幸に焼けのこつた所があり、堀川でも伊藤仁齋の古義堂だけは類火しなかつた。本圖はさうした焼失しなかつた場所を見るのに都合のよい地圖ではあるが、この圖すでに世上に發賣何回も同じ木版を使ひ耗らした前期のものを倉皇として使用したと見えて、大火圖は京都地圖としては餘程まづいものである。

本圖はやはり天明よりも古いが、小繪圖の一例であつて、寶曆甲戌歲改正畫工湖月堂彫工山本喜兵衛、寺町四條下ル所菊屋長兵衛再板、とある。木版墨摺、裏面に手引案内があること今の世のワラジャの京都圖にひとしい。

一五、改正兩面京圖名所鑑 安永七年戊正月（一七七八） 寺町佛光寺上ル菊屋長兵衛板 京都帝大藏本
これも實にこの小繪圖の一例で、菊屋は文生堂と稱し、寶曆版と同様にこれもその裏圖が名所手引になつてゐる。

猶此外に中小繪圖の彩色がなくて、分のあついせんくわ紙を用ひた墨摺は、いろ／＼無數にある。もし彩色をすれば一々色で描いてある筈である。市街をしめすに當り前期は黒色の充填したものであつたが（大火圖がそれである）、この期に入つて□枠形になる。古本屋がよくこれを知つてゐて「地圖の中のくろい市街は高うおます、わくになるとやすい」と蓋しこれも古圖鑑定の一法であらうと考へる。

第四期（十九世紀）の作品

- 一六、改正京町繪圖細見大成洛中洛外全 町々小名 天保二年版（一八三一） 京都府文庫本 京大藏本
一七、京都大繪圖 天保二年七月彫刻（一八六八） 慶應四年戊辰二月再刻 カツパ摺 京都帝國大學藏本
一八、京之圖 明治二年刊行 石田治兵衛出版 京大圖書館本 カツパ摺
一九、明治二年京都大繪圖 京大圖書館本 カツパ摺

世をふるに従つて、京都地圖の需用が増加したので種々の版が出た。しかしその大さは大繪圖五

千分一、と中繪圖一萬分一、小繪圖二萬分一、といふ風に分類されてゐた。今日古い京都の地圖の近世のものをみると常にさうしたものゝ一つにあたるであらう。

本圖第十六は天保二年版であつて、書肆は三條寺町、文叢堂竹原好兵衛である。著者は池田東籬亭であり中村有樂齋の畫で、刀工井上清兵衛、天保二年辛卯秋七月開板とある。縮尺五千分一、大繪圖の流を汲んだもの、紙も素敵な超大型であるのが珍らしい。文叢堂はこれと同時に一萬分一もしくは一萬五千分一の京都圖を出してゐる。

超大型は京大圖書館にあるが紙は楮すきの上等西の内で、于時天保二年辛卯秋七月開板とある。京都府文庫のものと同じ墨摺である。

五千分一の舊來の型の大繪圖は、同じく京大圖書館にある。それは紙がやゝ薄い、圖柄もやゝ違つて、作者の名がない。天保二年辛卯七月彫慶應四年戊辰二月再刻、書肆文叢堂竹原好兵衛版」とある、全く前者とちがう。面白いのは墨摺の上に山は緑、郡と名所は樺、町は黄、御所は朱、二條城や薩摩屋敷の類は樺、橋は黄、川は緑といった風の色(泥ゑのぐ)がカッパ摺にしてあることである。カッパ摺といふのは下繪の色をつけた部分だけ型紙(合羽)をほつて、それを上からあて、色を塗つて仕上げたものである。その特徴はあまり長いものは、型がやぶれるから「ツナギ」をのこしたから、その部分だけ色が入つてゐないで、白く残るといふ點がある。本圖、川の部分にさうした白い「ツナギ」が多い。カッパ摺の好標本である。山の形も超大型とちがつて山水畫の風である。慶應四年といへば正に明治元年である。禁裏に菊の紋をいれて皇威大に盛んなるの狀態をしめして

ゐる。

つぎに一萬分一の中繪圖が京大地理教室に一枚ある。これにはやはり池田東籬亭と中村有樂齋の名がでてゐて、超大型と同形式の小さいものであり、墨に赤黄緑藍の四色摺にしてある。木版であつてカッパではない。却つてきりつとしまつた中繪圖である。

池田東籬は人名辭書にも出てゐる。その名は正韶字は鳳卿、書道の名家で、小説をもかいた。安政四年年七十で死んだ人であるが、さうした學者の努力の功空しからず我京都圖も一段の新し味をしめた。時代は既に近世に入つたので、林吉永の大繪圖では満足が出来なかつたので、かうした各圖の上に右の大地圖が出たのである。大きい丈けに全體の構圖も餘程改正され、お土居が正しく入つて市街地の分丈けは正しく分數に合する。次に伏見の町並も正しく記入されてゐる。表に公家屋敷や道法の類がなくなつて、「洛陽七口」、同「間の近道」といふ表をかくげた。之は時代が餘程變つて、人々が交通路に注意を拂うやうになつたことをしめすのである。いつ何時戰禍があるかもしれないから、さうした道筋に對して敏感になつたのであらう。龍華越、志賀越、山中越、青山越、如意越、小關越、江石越、大龜越、唐櫃越、松尾越、澁谷越、といふやうな東方への山道がすべて特筆されてゐるところに、血なまぐさい時代の面影が出てゐる。所司代屋敷に役人の名がなくなつて千本御屋敷と書し、火見櫓がいてゐる。火見櫓は當時の人々には珍らしく感ぜられたことであつたであらう。

猶右の超大型圖には當時文叢堂の出版した地圖類の廣告がつけてある。それには左の如く出てゐる。

る。

京繪圖藏板目錄

京三條通鉄屋町西北角
竹原好兵衛

改正京町繪圖細見大成 天保二年發兌 大々圖 京都繪圖の冠にして其くはしきことこれにまされるばなし

新增細見京繪圖大全 天保改正近刻大圖

新增細見京繪圖 中圖

細見京繪圖 小圖

京都指掌圖 中圖 此圖は墨すりにして彩色を加へ神社佛閣名所舊跡を見安くしたり

袖中京繪圖 新撰京繪圖 懷寶京繪圖 京都名所鑑 手引京繪圖 此外大中小圖墨摺彩色入等品々

早見京繪圖 中圖 此圖は諸方通路を專とし東は江州湖水西は丹波龜山迄

山城國大繪圖大々圖 此圖は山城一國の大圖にして云々

花洛一覽 一枚摺 此圖は洛中洛外山川寺社の風景を一紙に畫き彩色を加へまことに都の景色を一覽の中にそなへたるき

れいの畫面也

京之圖古板數十版有之古を好む風流の諸君は板元へ御入來御覽可被下候

天保新板京都順覽記幀本全三冊

此外名所めぐり獨り案内之本數々御座候

板元 竹原好兵衛

かうした各圖版について筆者はその最初の三圖と天保十一年の京都指掌圖を京大圖書館に、その他の六圖を山本氏藏本に就て實見することを得た。但しこゝに天保改正近刻とした大圖が、慶應四年に再刊されて出たのであつた。

天保十一年の指掌圖は京大圖書室藏本で墨摺の小繪圖であつて、五千分一の大繪圖を縮めたものである。

この外同じ時代のものに竹原出版の文久改正新選京繪圖、嘉永改正新選京繪圖森川保之著 竹原好兵衛出版がある。

竹原以外には、六角柳馬場、平野屋茂兵衛出版文久改刻繁榮京都御繪圖、もしくは三條寺町木屋吉兵衛出版の文化改正京都指掌圖（文化九年八月）がある。いづれも小繪圖であるが猶此外にもさうしたものは多かつたであらう。但しこの最後のものは前記小繪圖の名残と見てよいらしい。

京都市街圖としてかうした精密にして且種類の多くの地圖が出たのは、實に時代の影響であつたのであるが同時にこの頃既に銅版印刷が行はれてゐたのに刺戟された結果であるらしい。

黒田源立氏の「上方繪一覽」にもある通り、木版の地圖は寛永寛文の頃天下に行はれ、多くの世界圖、唐圖、日本圖、京繪圖、大阪圖、江戸繪圖等が發賣された。それが天保頃になつて京都東山鷺尾町に住んでゐた松本保居（玄々堂）の工夫によつて銅版にかはつた。天保七年丙申に、地球方圓全圖及地球圖略說、大日本輿地圖、日月寫真圖などを出版したのが玄々堂の遺品である。二代玄々堂も綠山と號し花洛一覽圖、江戸一覽圖、などをかいたがこの一派の者は銅刻で四條以下洛東の名勝風景を鳥瞰圖風にうつしたのが多かつた。

蓋しさうした玄々堂の地圖に先行してこの京都細見圖が出たのである。西洋の影響がやうやくかうした技術の上にも及んできたのである。

話が横道にそれたが、この天保の細見圖の跡をくんだものに第十八、明治二年版の中繪圖京之圖がある。これは一條智恵光院東入石田治兵衛といふ書店の出版である。その特色は維新の變革に際し京都に學區が出来たので、その變化をらしむるにあつた。従つてこの圖の表には上下京小學校并會所が出てゐる。加州、薩州、土州、阿波、肥後、彦根、越前の屋敷が目につくと同時に、二條城北の兵部省や荒神口川端の御操練場がめづらしい。精巧なカッパ摺である。しかしその圖柄はさきの天保版とあまりちがはないが縮尺は凡八千分一であるから、一萬分一の中繪圖の類である。

當時かうした新地圖は無數に出た。村上勘兵衛の出版した第十九、明治二年の京大繪圖もやはりその一例であつて、全くこの天保版にひどしいカッパ摺である。明治五年にも猶同一の木版を摺つて賣り出してゐる。けれども特にこゝに予の説明せんとする明治九年の京都圖ほど新時代の變更的意味をしめすものはない。(未完)